

金堂

金堂は物理的にも精神的にも智積院の中心に位置する建物である。当初の建物は智積院の第 10 世化主の管長である専戒が 1704 年に建設を開始し、その翌年に完成した。このような大規模な建設事業がこれほどのスピードで完成したのは、徳川の第 5 代将軍綱吉の母親である桂昌院による巨額の寄付のおかげであった。この資金提供は、この寺が徳川幕府時代（1600～1868 年）を通じて徳川家から強力な支援を受け続けたことを象徴する例である。

金堂は 1882 年の火災で焼失し、100 年近くにわたって再建されることはなかったが、1975 年、真言宗の宗祖である空海（弘法大師）の生誕 1200 年を記念し、再建された。1975 年の祭礼において奉納された。本尊は大日如来であり、その両側には 2 つの世界を表現した曼荼羅〔胎蔵界曼荼羅と金剛界曼荼羅〕が飾られている。大日如来と曼荼羅は真言宗の教義において中心的な位置を占めている。